

## 神様を真の王とする

サムエル記上8章1～22節

2022年4月24日  
松田 基子 師

私達が信じ従っている神様は、天地万物の創造主であられ、全知全能の神様です。その様な偉大な神様が、世界を創造され、私達人間をも造り生かして下さっています。ところで、神様はこの造られた世界を、更に麗しく成長させて行くことをお考えになっていました。その事を、人間と愛を築いていくことで実現させようとなさっていました。

しかし、人間は、神様の愛を裏切り、誘惑者の、神様への疑いを起こさせる、

『あなたも、神様と同じ様に、善悪を知る者となれる』

と言う挑発に乗って、神様の命令を破ってしまいました。人間の心の底にある、神様に対する根本的な罪は、この神様への疑いと、神様の様になること、つまり、神様に聞き従うのではなくて、

『自分の思い通りに、自己中心に生きる』ことです。人間は、人類の祖以来ずっとこの罪を抱え、その心で生きてきました。驚くべき事は、神様はそんな人類を、滅ぼし尽くされるのではなくて、**地上の歴史**を、人類の永遠の**滅びからの救い**と、神様との愛の回復に導き続けて来て下さったことです。

先週はイースターでした。人類救済のご計画は神様の招きに応答した、アブラハムの系譜に、神の御子イエス・キリストが、人の世に生まれて来られ、その身に全人類の罪を負い、十字架に架かり、人類の罪を贖われたことによって、神様はイエス様を復活させられ、人類に罪の赦しと、神様との愛の関係を回復する道を開いて下さいました。

そこに至るまで、神様は如何に憐れみ深く、また、忍耐強く、人間の歩みに合わせて、導いて来て下さった事でしょうか。聖書はその一筋の道を綴っています。今朝は、神様が如何に憐れみと忍耐とに満ちて導いて来られたかを知り、その愛は今も尚、私達にも注がれて居る事を知りたいと思います。

さて、神様は、アブラハムの子孫イスラエル

がエジプトの奴隷であった時、モーセを指導者に立てて、エジプトから救出し、アブラハムに約束されたカナンの地に導かれましたが、シナイ山麓に於いて、**出エジプト記**19章5節で、神様はイスラエルに対して、

「いま、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間にあって、わたしの宝となる。世界は全てわたしのものである。あなたたちはわたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる」

と言われ、民との契約を結ばれました。

ですから、イスラエルを支配し、導かれるのは、神様です。指導者のモーセは、どこまでも神様の僕として、神様の御心に民を導く預言者でした。イスラエルの民が、カナンに定着したのは紀元前1250年頃とされています。彼らはヨシュアによって部族ごとに、土地の配分を受けました。共同体は部族の範囲でした。その12部族を連帯されるものは、主なる神様への信仰でした。様々な問題は、士師と呼ばれる信仰のリーダーが裁きました。

紀元前1070年頃から、イスラエル宗教連合のリーダーとして、有能な裁き人として、活躍したのが、サムエルです。ところでイスラエルのカナン侵入は 東側の内陸部から、入って行きましたが、紀元前12世紀頃、西側の地中海側からは、ペリシテ人達がカナンに侵入してきました。彼らは海洋の民で、その生きて来た世界は広く、軍事的にも、文化的にも優れた民族でした。彼らは地中海沿岸に定着しました。その後、彼らは領土を拡大するために、どんどん内陸部に侵攻して行きました。そこで衝突したのが、イスラエルの南部の部族です。

イスラエル人にとって、ペリシテ人は脅威でした。サムエル記上の、7章3節から、

「サムエルはイスラエルの家の全体に対して言った。

『あなたたちが心を尽くして主に立ち帰るといふなら、あなたたちの中から異教の神々やアシュタロトを取り除き、心を正しく主に向け、ただ主にのみ仕えなさい。そうすれば、主はあなたたちをペリシテ人の手から救い出して下さる。』

イスラエルの人々はバアルとアシュタロトを取り除き、ただ主にのみ仕えた」

とあります。

バアルは豊穡の神とされ、アシュタロトはその配偶神で、同じ様に豊穡の神々でありました。先住民たちが礼拝していた、神々です。イスラエルの民は、その神々を拝む事によって、自分たちも豊かな産物が得られると思って拝んでいました。そこでサムエルは、その様な神々から離れる事を民に訴えました。その結果13節に「ペリシテ人は鎮められ、二度とイスラエルの国境を侵すことはなかった。サムエルの時代を通して、主の手はペリシテ人を抑えていた」

とあります。

サムエルは一途に神様に聞き従いイスラエルの信仰を導きました。7章15節以下には、「サムエルは生涯、イスラエルのために裁きを行った。毎年、ベテル、ギルガル、ミツパを巡り歩き、それらの地でイスラエルのために裁きを行い、ラマに戻った。そこには彼の家があった。彼はそこでもイスラエルのために裁きを行い、主のために祭壇を築いた」

とあります。

サムエルは民の中に入って行って、神様の御心に従う判断を与えました。ただ、サムエルが巡り歩いた、ベテル、ギルガル、ミツパの礼拝所は30km圏内にありました。この様にサムエルはイスラエル宗教連合の偉大なリーダーでしたが、彼も人であり、年を取り、老化して行く事からは免れませんでした。8章1節を見ますと、

「サムエルは年若い、イスラエルのために裁きを行う者として、息子たちを任命した」

とあります。長男の名はヨエル、次男はアビヤといい、サムエルは、この2人をイスラエルの南端、サムエルの家のラマからは、南に90km程度離れたベエル・シェバで裁判に当たらせましたが、3節に、

「この息子たちは父の道を歩まず、不正な利益を求め、賄賂を取って裁きを曲げた」

とあります。サムエルにとって、2人の息子は大きな悩みでした。人間の限界とでも言いましょうか、サムエルの師であるエリの2人の息子も、

親とは正反対の、神様を畏れない罪の生き方をしました。

それを目の当たりにしてきたサムエルでしたが、他者を導く事は出来ても、わが子を導く事は出来ませんでした。

『偉大な指導者たちは、余りにも大きな重荷を負わなければ成らないために、自分の家庭を顧みる余裕がなく、親の責任が果たせなかった』

と言う事が起こりました。今日では家庭第一が叫ばれますが、人間の思い、考えは未熟で、不完全で、返って親の考えで子供を支配して、道に逸れることも起こります。親の務めは、

『その子自身が神様に結ばれるように、神様が子供を捕らえ、導いて下さるように、祈り努めて行く以外に、ないのではないのでしょうか。』

さて、イスラエルの各部族の長老達は、サムエルの息子達を、自分たちの信仰の指導者とする事は出来ませんでした。

そこで4節に、

「イスラエルの長老は、全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て彼に申し入れた。」

『あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください』

とあります。サムエルにとって、長老達の申し入れは意外でした。サムエルは自分の人生を賭けて、

『イスラエルは、神様の宝の民であり、神様の祝福の基として、祭司の王国とされたのです。イスラエルは神様が支配しておられ、導いて下さっているからこそ、守られ生かされている』

ことを教え導いて来ました。ですから、イスラエルはその生き方が、周りの国々と違って、当たり前なのです。それなのに、長老たちは天を見上げてはいなかった。

『周辺の国々の行き方を羨ましく思っていた』と言うことが、分かったのです。

サムエルは年を取り、2人の息子にも、長老達にも、自分の思いが伝わらず、無力感に打ちの

めされた事でしょう。彼が訴えて行く所は、神様以外にありませんでした。6節に、

「裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った」

とあります。サムエルのこの祈りに、神様は何とお答えになったのでしょうか。7節に、

「主はサムエルに言われた。

『民があなたに言うままに、彼らの声に従うがよい。彼らが退けたのはあなたではない。彼らのうえにわたしが王として君臨することを退けているのだ。彼らをエジプトから導き上って来た日から今日に至るまで、彼らのする事といえば、わたしを捨てて他の神々に仕えることだった。あなたに対しても同じことをしているのだ』

とあります。

人間は、創世記3章で、神様を疑い、自分も神様のように、自分の思い通りに生きられると思いい込んで、神様に叛いて以来、自己中心に生きてきたのですが、実は自己中心に生きるということは、その初めの誘惑から分かりますように、創世記3章5節の、

「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」

の誘いの通り、

『神のようになりたい』

でした。実は自己中心と言うのは、如何にも自分と言う、自己が確立している様に見えますが、そうではないのです。自己が確立して居ないから、何々のようになりたと思いい、それを押し通して行くのです。長老達の願いは、

「ほかのすべての国々のように」

でした。イスラエルの長老たちは、

『目に見えない神様では心許ない。自分たちは軍隊をもって国を統一する王を持たず、王の下に軍隊の訓練が成されていない。こんなことでは、軍事力を持つペリシテ軍や他の国に対抗する事は出来ない』

その不安で一杯だったのです。だから

『一刻も早く、周りの国々のように、王を与えよ』

との、願いでした。

神様に信頼しないで、何時も周りを見て、周り

の国々に倣って、神様に叛いて来たのは、出エジプト以来の事でした。長老達もまた、神様に聞き従う事はしませんでした。神様はサムエルの心を慰めるかのように

「あなたに対しても同じことをしているのだ」と言っておられます。それにも拘わらず、神様はサムエルに、

『イスラエルを戒めよ』

とは言われませんでした。9節に、

「今は彼らの声に従いなさい。ただし、彼らにはっきり警告し、彼らの上に君臨する王の権能を教えるおきなさい」

と言われました。神様は民の性質をよくご存知でした。民は実際に経験しなければ納得しないのです。

『痛い目に遭わないと分からないのです。』彼らはその道を選んだのです。人は自分の言ったことに、責任を取らなければ成りません。

サムエルは王を要求する民に、神様からの言葉を伝えました。11節から長々と、王の権能が記されています。

「まず、あなたたちの息子を徴用する。それは戦車兵や騎兵にして王の戦車の前を走らせ、千人隊の長、五十人隊の長として任命し、王のための耕作や刈り入れに従事させ、あるいは武器や戦車の用具をつくらせるためである。」

「また、あなたたちの娘を徴用し、香料作り、料理女、パン焼き女にする。」

「また、あなたたちの最上の畑、ぶどう畑、オリーブ畑を没収し、家臣に分け与える。」

「また、あなたたちの穀物とぶどうの十分の一を徴収し、重臣や家臣に分け与える。」

「あなたたちの奴隷、女奴隷、若者のうちの優れた者や、ロバを徴用し、王のために働かせる。」

「また、あなたたちの羊の十分の一を徴収する。」

「こうして、あなたたちは王の奴隷となる。その日あなたたちは、自分が選んだ王のゆえに、泣き叫ぶ。しかし、主はその日、あなたたちに答えてはくださらない」

と、サムエルは民に、

『王を求める事は、王の奴隷になる事で、一生涯、王のために働き続け、捧げなければ

ならない、苦しい生活になるのだ』と、警告を与えました。

しかし、19節に、  
「民はサムエルの声に聞き従おうとせず、  
言い張った。

『いいえ。我々にはどうしても  
王が必要なのです。』

『我々もまた、他のすべての国民と同じ  
ようになり、王が裁きを行い、王が陣頭に  
立って進み、我々の戦いをたたかうのです』  
と言っています。この言い張る事が、自己中心  
の現れです。また、神様から目を離せば、周り  
と同じでないと、安心出来ないのです。神様に  
信頼するよりも、目に見え、手で触れるものを得  
なければ、安心出来ないのです。

神様を信じると言いながら、自分を言い張る、  
イスラエルは、また私達の姿でもあります。  
サムエルは尚、頑なに言い張るイスラエル人の  
王を求める訴えを、神様に申し述べました。  
すると神様は、22節で、

「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい」  
と言われました。サムエルは神様の命令に従  
わざるを得ません。サムエルは相応しい人物  
を捜すつもりです。そして、イスラエルの人々  
に、

「それぞれ、自分の家に帰りなさい」  
と命じて帰しました。

神様はこの様なイスラエルを、  
『もう知らない。勝手にして痛い目に  
遭いなさい』

と、放り出されることはありませんでした。  
神様はサムエルに、ご自身の御心に適う人物を  
示されました。私達はここに、神様の憐れみと、  
忍耐を見る事ができます。神様はイスラエルの  
身勝手さにも拘わらず、アブラハムの系譜に、  
御子を救い主として送ろうとお決めになった以  
上、彼らのご自身の思いに反しても、それをもお  
用いになって、ご自身の御計画の実現に歴史を  
進めて行かれるのです。

イスラエルの最初の王、サウルは、神様に選  
ばれたにも拘わらず、彼は神様に信頼仕切れ  
ず自分の判断に頼って、王座を守り抜く事はで

きませんでした。次のダビデは、神様に全信頼  
した事によって、神様から永久の王座を受ける  
約束が与えられました。神様は人間の失敗を  
も用いて、ご自身の御計画を進めて行かれるこ  
とは、この様なイスラエルの歴史を通して知る事  
が出来ます。

私達の信仰は、何よりも神様への信頼です。  
究極的に、私達を支配しておられるのは、自分  
の命の与え主、創造主なる神様です。このお  
方こそ、私達の真の支配者、王です。このお  
方の命令に従ってこそ、命に生きる事ができま  
す。時代は愈々混迷の度を増して行きます。  
その様な中で世相に振り回される事なく、神様  
に信頼して、上からの平和と知恵を求めて、  
神の国の到来の為に祈り、神様に成すべき努め  
を求め、従って行こうではありませんか。

お祈りをいたします。  
私達の命の与え主である天の父なる神様

私達を真に生かし、導いて下さっているのは、  
造り主であるあなた様です。あなた様こそ、私  
達の真の支配者、王であられます。

私達は常に、私達を最善へと、導いて下さっ  
ているあなた様に、全信頼し、あなた様の御心  
を求めて、この地上の務めを全うする者とならせ  
て下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によつて  
お祈りを致します。

アーメン。